

図1 岩手県の盛岡市と宮古市
 県庁所在地の盛岡市には「医師」が多く住む。一方、宮古市は、沿岸の中核都市であるが、「医療過疎」地域である。

し具合が悪い」と言って早く床につき、
 容体が急変した。「俺は病院に行かねえ」と救急隊員と「戦った」後、救急車にも自ら歩いて乗り込んだが、循環器の専門医が当時常駐しなかった宮古

病院から盛岡の中央病院に再搬送される2時間強の道のりの途中で(図1)、母に見守られて、父は息を引き取った。享年83歳(満82歳)。56歳のときに心筋梗塞で倒れて「三途の川」を渡り

2 急性心筋梗塞

父の死因の「急性心筋梗塞」は、「虚血性心疾患」の一つであり、「動脈硬化」との関係で冠状動脈の血管内側が閉塞(または狭窄)して心筋への血流が阻害されることによって発症する(図2)。「心筋梗塞」を含む「心疾患」は、日本人の死因別死亡率で第2位を近年維持し続けており(図3)、第3位の脳血管疾患(≠脳卒中)でも、「動脈硬化」が関連する「脳梗塞」が占める割合が増加している。

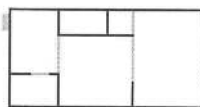
「動脈硬化性疾患」の危険因子としては、①脂質異常症(かつての高脂血症)、②高血圧、③喫煙、④糖尿病、⑤加齢、⑥冠動脈疾患の家族歴などが

【第2回】

仮設住宅での突然死

「健康な地理学」の視点から

岩船昌起



1 深夜の電話

2011年の冬、午前1時過ぎ、岩手県宮古市に住む母から電話が入った。「父ちゃんが死んだあ〜」。前置きなしでの第一声で、泣いてはいないが、母がかなり動転していることがわかった。「急性心筋梗塞で亡くなった」概要を聞いた後に「できるだけ早く帰る」とを伝えて電話を切り、インターネットで鹿児島発羽田行き朝一の飛行機を手配して、喪服や数珠をキャリアーバ

ックに詰め、この先一週間の仕事をキャンセルさせてもらうメールを方々に送信し始めた。「肉親の死」は誰もが経験するものと頭ではわかっていたが、それに突然直面し、感情をコントロールできず、時々、涙が溢れてきた。東日本大震災では、自宅が全壊したものの、筆者の両親はたまたま高台に出かけており、津波で命を落とすことがなかった(本誌「緊急特集…東日本大震災(56巻6月号)」)。避難所や倉庫などでの暮らしを経て、2011年



写真1 調査を手伝う父
 2011年の冬に亡くなる直前まで「普段通りの生活」をしていた。宮古市閉井川河口堤防の撮影時にも水際までヒョコヒョコと動いてスケールを当ててくれた。2011年9月13日撮影。

6月から応急仮設住宅(以下、「仮設住宅」)での生活が始まり、「なかなか進まない」「復興」にあせりを感じながらも、両親の「生活再建」への意気込みは盛んであったはずだ。正月に訪ねてくる孫の好物の「胡桃餅」をつくるため、父は、山に入って採ったクルミを一つ一つ割っては中から実を取り出す作業を夕方まで続けた。風呂に入って夕食をとり、「少